

Title	結腸を原発とする転移性膀胱腫瘍の1例
Author(s)	太田, 昌一郎; 酒本, 護; 風間, 泰蔵; 布施, 秀樹; 片山, 喬
Citation	泌尿器科紀要 (1993), 39(9): 845-847
Issue Date	1993-09
URL	http://hdl.handle.net/2433/117926
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

結腸を原発とする転移性膀胱腫瘍の1例

富山医科薬科大学泌尿器科学教室 (主任: 片山 喬教授)

太田昌一郎, 酒本 護, 風間 泰蔵

布施 秀樹, 片山 喬

A CASE OF METASTATIC URINARY BLADDER
TUMOR FROM COLON CARCINOMA

Shouichirou Oota, Mamoru Sakamoto, Taizou Kazama,

Hideki Fuse and Takashi Katayama

From the Department of Urology, School of Medicine, Toyama Medical and Pharmaceutical University

A 62-year-old female patient underwent an operation for a brain tumor. The pathological diagnosis of the resected specimen was metastatic adenocarcinoma with signet-ring cells. The primary lesion was found in the ascending colon. In addition, a non-papillary and pedunculated tumor was found on the right wall of the bladder on cystoscopy. Biopsy of the bladder tumor showed adenocarcinoma with signet-ring cells, which was the same as the histologies of the colon and the brain tumors. Under the diagnosis of metastatic bladder tumor, transurethral resection of the tumor was performed. This is the first case of metastatic bladder carcinoma from the colon reported in Japan.

(Acta Urol. Jpn. 39: 845-847, 1993)

Key words: Metastatic bladder tumor, Colon cancer

緒 言

他臓器からの膀胱への癌侵襲は、隣接臓器からの連続浸潤がおもで遠隔転移は比較的少ない。今回われわれは結腸を原発とした転移性膀胱腫瘍の1例を経験したので若干の考察を加えて報告する。

症 例

症例: 62歳, 女性

主訴: 結腸癌の尿路系への浸潤の精査目的

既往歴: 特記すべきものなし

家族歴: 姉が胃癌で死亡

現病歴: 1992年4月12日感冒に罹患後回転性めまい出現しその後食欲不振、嘔気出現した。4月18日歩行障害が出現し4月21日近医脳神経外科受診した。そこで小脳橋角部腫瘍と診断され5月1日富山医科薬科大学付属病院脳神経外科紹介入院となった。5月20日同腫瘍の摘出術を施行し病理学的検索にて転移性腫瘍(低分化型腺癌)と診断された。その後の原発巣検索の結果同院第二外科にて上行結腸癌と診断された。6月18日尿路系への浸潤の精査目的で当科外来初診とな

った。

なお、血尿、頻尿および排尿困難等は認めなかった。

当科初診時現症: 身長 140.0 cm, 体重 39.0 kg, 皮膚・粘膜に異常を認めず。胸腹部理学的所見に異常なし。表在リンパ節は触知せず。腎も触知しなかった。

同検査成績: 検尿は糖陽性・細菌陽性を除き異常なし。尿細胞診 class I。血液一般・生化学は軽度の貧血を認めた以外異常は認められなかった。腫瘍マーカーは CEA 0.6 ng/ml (正常値 2.5 ng/ml 以下) CA 19-9 10 U/ml (正常値 37 U/ml 以下) であった。X線検査: 胸部X線写真は異常なし。KUB・IVP でも異常を認めなかった。CT では膀胱右側壁に小腫瘍形成を認め、小骨盤部リンパ節への転移は認められなかった。膀胱鏡検査: 右側壁に単発・小豆大・有茎性・表面平滑・非乳頭状・赤色の腫瘤を認めた。なお、周囲粘膜に発赤はなかった (Fig. 1)。経腹的超音波検査: 右側壁に有茎性の腫瘤を認めた。また、筋層への浸潤も認められなかった (Fig. 2)。術前病理組織診断: 6月29日膀胱鏡下に腫瘤部分を生検した。光顕所見にて低分化腺癌に印環細胞を混ざる組織 (Fig. 3)

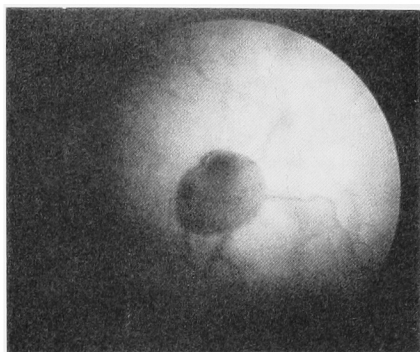


Fig. 1. Cystoscopy shows a non-papillary and pedunculated tumor

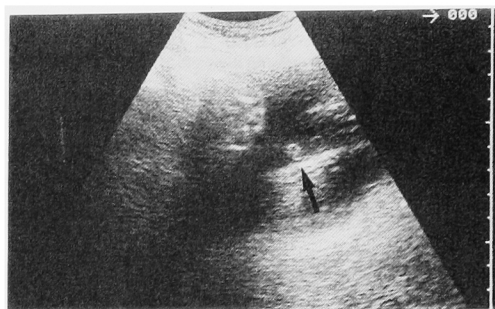
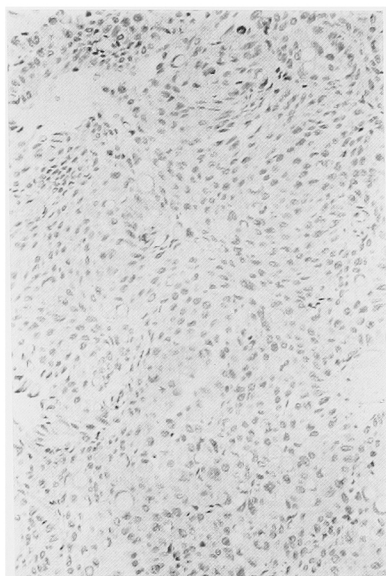
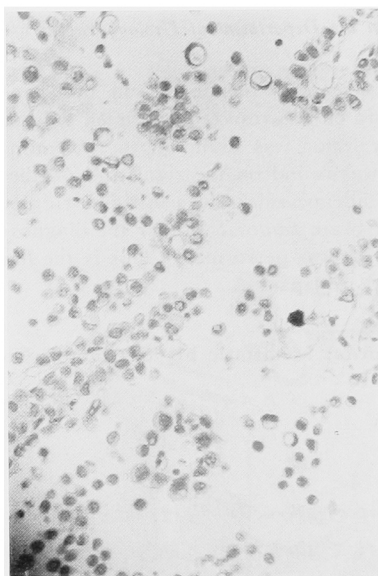


Fig. 2. Ultrasonography (transabdominal) shows no tumor invasion into the muscle layer



Bladder tumor (H.E. Stain ×100)



Primary lesion (colon) (H.E. Stain ×200)

Fig. 3. Pathological specimen of the bladder tumor and primary lesion shows poorly differentiated adenocarcinoma with signet-ring cell

で脳の摘出標本および6月17日施行の結腸腫瘍粘膜生検の標本とも組織型が一致し転移巣と診断された。経過：7月20日原発巣結腸癌に対して右半結腸切除術およびリンパ節郭清術を施行した。肉眼上肝転移は認められなかった。大動脈・上腸間膜動脈分岐部までリンパ節郭清を行った。その大半に転移が認められこの手術は非治癒的と判定された。なお、原発巣の浸潤度は漿膜下層までであった。続いて8月4日TUR-Btを施行した。腫瘍の直径は約3mmで肉眼上筋層への浸潤は認められなかった。現在術後1年にて当科および当院外科でテガフル1日600mg経口投与にて経過観察中であるが再発、転移を認めず健在である。

考 察

続発性膀胱腫瘍は大きく分けて近接臓器からの直接浸潤と遠隔臓器からの転移とに分けられる。頻度はかなり前者の方が多く村山¹⁾によると悪性腫瘍剖検361例中32例に膀胱転移・浸潤が見られそのうち近接臓器からの連続性浸潤が81%を占めており遠隔転移は19%であった。欧米ではPerez²⁾らは、直接浸潤を含まない転移性膀胱腫瘍が悪性腫瘍剖検例の2.1%と報告している。Goldstein³⁾は文献的に転移性膀胱腫瘍146例を集計し原発巣として悪性黒色腫55例、胃癌34例、乳癌16例が多く結腸原発は2例にすぎなかったと報告している。本邦ではわれわれの調べるかぎりの

Table 1. Summary of 44 cases of metastatic bladder cancer in the literature tabulated according to organ of origin in Japan

原 発 巣	例 数
胃 癌	26
腎 癌	9
乳 癌	2
悪性黒色腫	2
直 腸 癌	2
結 腸 癌	1 (自験例)
肺 癌	1
精 巣 腫 瘍	1
計	44

転移性膀胱腫瘍44例 (Table 1)⁴⁻¹⁰⁾ では原発巣は胃癌, 腎癌が多く結腸が原発のものは見当たらなかった。本邦例について検討してみると男女比は男子に多く25:19であった。発生年齢は50歳代に最も多く13例, ついで70歳代8例, 60歳代7例, 40歳代6例であった。それ以外の年齢にはあまり見られなかった。初発症状は血尿, 頻尿, 排尿時痛がほとんどで本例のように偶然発見された例はなかった。膀胱への転移形式としては1)リンパ行性転移, 2)血行性転移, 3)直接播種, 4)管腔性転移の4つが考えられるが本症例では1)の可能性が強いものと思われる。通常, 膀胱からのリンパ流は腰リンパ本幹を通り傍大動脈リンパ節群に介して消化器系リンパ管と交通しており, 正常状態ではリンパ管内の弁がリンパの逆流を防いでいるが, 本例のようにリンパ節への広汎な転移や手術でリンパ系が閉塞されると, 脈管の拡張により弁が障害され逆行性転移が起りうると考えられる。自験例については脳転移巣, 結腸原発巣, 膀胱転移巣のすべてを外科的に切除したが腹腔内リンパ節に広汎な転移が発見され残念ながら予後は不良と考えられた。転移性膀胱腫瘍を原発臓器別に見た場合には腎癌からの転移性膀胱腫瘍は尿管口周囲に発生することが多くそれは管腔性に腫瘍細胞が膀胱内に播種したと考えられる⁶⁾。また, 胃癌からの場合は頂部に多く発生するとされている^{4,5)}。結腸

癌からの場合は報告が本症例のみなので発生部位についてまとめることは今は不可能であるが今後症例を重ねての検討により何らかの傾向が明らかになってくることも考えられる。

結 語

結腸を原発とする転移性膀胱腫瘍の1例を経験したので報告した。

本論文の要旨は第358回日本泌尿器科学会北陸地方会において発表した。

文 献

- 1) 村山鉄郎, 近藤猪一郎, 松岡規男・各種悪性腫瘍の泌尿器系臓器に対する侵襲. 泌尿紀要 21: 209-213, 1975
- 2) Perez-Mesa C, Pickren JW, N, Woodruff, et al.: Metastatic carcinoma of the urinary bladder from primary tumors in the mammary gland of female patients. Surg Gynecol Obstet 121: 813-818, 1965
- 3) Goldstein AG: metastatic carcinoma to bladder. J Urol 98: 209-215, 1967
- 4) 水谷陽一, 橋村孝幸, 北村太一, ほか: 原発巣(胃癌)の診断が困難であった若年女子続発性膀胱腫瘍の1例. 泌尿紀要 36: 605-608, 1990
- 5) 中村 薫, 日原 徹, 西海孝男, ほか: 胃癌による転移性膀胱腫瘍の1例. 泌尿紀要 38: 845-847, 1992
- 6) 谷川克己, 松下一男: 腎細胞癌の膀胱転移の1例. 泌尿紀要 36: 927-929, 1990
- 7) 鯉川弥須宏, 小藤秀嗣, 簗田 優: 乳癌の膀胱転移の1例. 西日泌尿 53: 401-403, 1991
- 8) 入澤千晶, 恩村芳樹, 松下鉦三郎: 転移性膀胱悪性黒色腫の1例. 泌尿紀要 33: 424-427, 1987
- 9) 増井節男, 大森章夫: 消化器癌による転移性膀胱腫瘍の1例. 西日泌尿 45: 1031-1035, 1983
- 10) 竹原 朗, 西 昇平, 北田真一郎, ほか: 膀胱に転移した肺小細胞癌の1例. 西日泌尿 52: 1779-1781, 1990

(Received on February 1, 1993)

(Accepted on April 27, 1993)